【優秀賞】愛媛朝日テレビ賞
「手話が教えてくれたこと」　内子町立大瀬中学校　２年　谷岡向日葵

　みなさんは「手話」がどんなものか知っていますか。手話は漢字の通り手で話します。最近は、ドラマでも話題になっています。私も、ドラマを見て手話に興味を持ち習い始めました。

　私の住んでいる地域では毎年小・中学校と地域の方で協力して「人権まつり」を行っています。人権まつりでは「明日へ」というオリジナル曲を手話をしながら歌います。小学生は、一度手話の先生が学校に来て教えてもらい、その後は四年生が中心となって練習します。私も小学生のときに歌の手話を覚えたので少しは手話が分かると思っていました。でも、実際に習い始めると歌と会話は全然違いました。歌は作ってある動作を覚えるだけで、ダンスを覚える感じでした。しかし、会話は覚えている動作を組み合わさないといけません。しかも、手話は口で話すときとは語順が違う部分もあって難しいです。そして、手話で話すときは顔の動きも重要です。普段より大げさにしないと相手に気持ちが伝わりにくいところも難しいです。

　手話を習い始めて難しいこともたくさんありましたが、楽しいこともたくさんありました。一つ目は、手話の成り立ちです。私は新しい単語を習うときにその手話の成り立ちを聞くのが好きです。手話には、その単語のジェスチャーやそ

の単語を連想する動作が元になっているものがたくさんあるからです。そのため、知らない単語があっても少しは動作から予想できるので面白いです。

二つめは、少しずつでもできるようになって相手に言いたいことが伝わると、とてもうれしいことです。一緒に習っている弟と家で習った手話を使って手話をしてみると、とても楽しいです。私はバス通学で小学生と同じバスに乗っています。弟がバスに乗ってくるときに窓の外から「お疲れ」という手話をしてくれるのもうれしいです。

私はまだ手話を使って、耳の聞こえない人と話したことはありません。ほんの少し前までは、手話をドラマでやっていたから習っていただけでした。でも、以前スーパーで手話を使って話をしている人を見かけてからは少し変わりました。「私の近くにも手話を使っている人がいたんだ。」と、手話を身近に感じたからです。このことがあってから、もっと手話を頑張ろうと思うようになりました。手話を使って話をしている人たちとも話してみたいなと思ったからです。早く話せるようになるためにも、もっと手話の勉強を頑張りたいです。

少し話は変わりますが、みなさんは聴覚障がいの人がどうやってコミュニケーションをとっていると思いますか。まず、手話を思い浮かべる人が多いと思います。ですが、実際に手話を使って話をしている人は約二割だそうです。聴覚障がい者といってもそれぞれで全く聞こえない人もいればゆっくり話してもらっ

たり一対一で話したりする場合には普通に会話できる人もいます。聴覚障がいは外観から分かりにくい障がいです。私も最近仲のよい先輩が片方の耳に軽い難聴を持っていたことを知りました。私はその先輩とよく話をしていましたが、全然気がつきませんでした。よく話をしていた私でも全然気がつかなかったので、初めて会った人ならなおさら分からないと思います。だから、無視されたと感じたときや、話を聞いていないなと感じたときには、相手には聞こえにくいのかもしれないと考えるようにしたいです。聴覚障がい者は誤解されることが多いそうなので気をつけたいと思いました。

　最近手話教室の先生に教えていただいた言葉があります。「ノーチャリティー　バット　ア　チャンス」という言葉で、「保護より機会を」という意味です。この言葉は、日本の障がい者スポーツの父と言われている中村裕さんの言葉です。昔、障がい者は働かなくていいと言われていた時代があったそうです。そうすると、家や病院に閉じこもり暗い顔をしている人が多くなります。中村さんは、そんな日本に障がい者スポーツを広めました。その後、障がい者が社会復帰をしやすいようにと「ノーチャリティー　バット　ア　チャンス」を理念とした太陽の家を作ったそうです。そのおかげで障がい者も保護されるばかりでない今の社会ができたのだと思います。

　私も将来、障がいのある人と働くことがあるかもしれません。もしそうなった

らそのときは自分でできることは見守り困っていたら積極的に手伝いたいと思います。障がいのある人も学校や会社に通っている今だからこそ、私にできることは何でもしたいと思います。